

第四章
物々交換

第四章 物々交換

テレビにはオリンピック・パラリンピック延期のニュースが流れる。

『ウイルスとの戦いに打ち勝った証しとして延期していたオリンピック・パラリンピックを盛大に開催したい』なんて言ってるけれど人間のおごりだわ。ウイルスとの共存を真剣に考えるべきなのにね」

山本のため息が漏れる。

「山本さんの言うとおりにこれは戦争じゃない。あらゆる生命体がこの地球の環境をどのようにして改善するのかという環境問題だ」

「環境保護を訴える団体は自然を賛美するけれど、自然というか野生というか、そういう環境は非常に厳しいわ。つまり弱肉強食の世界。もう人類は自然の環境で暮らすことはできないわ。金持ちほど自然環境に順応できない。金持ちでなくても人類は停電が一日続けば生きることができないわ」

「そうじゃな。一応わしは金持ちだが、大地震に見まわれたら『助けてくれ』と大金を積んでも誰も助けに来んじやろ。なんとか助かればの話じゃが、そのとき金がモノを言うかもしれんが……」

「ちよつと話の方向が違うんじゃないかなあ」

「そうでもないわ」

「？」

第四章 物々交換

「金がモノを言うから話が前に進まないの。お金がモノを言わなかった時代……遠い昔、人類は災害に遭ったとき助け合ったわ。ワラで作った小屋が潰れても被害はたいしたことはなかった。と言うより貨幣がない時代では被害額を計算できなかった。それが貨幣経済社会になると被害額はすぐに天文学的な数字になったわ。それに家を建て直すにもワラがない。逆に立派な家の下敷きになって死んでしまう。意外とこのアパートの方が地震で死ぬ確率は低いかもね」

「なるほど。このポロア・パートを見直しました」

田中は大家が怒るのではと心配したが大家は納得したように頷く。

「わしもここに住むことにするか」

ホッとした田中は失言を追加する。

「住むのなら下の階にしてくださいね。山本さんなら隣の部屋がいいけれど」

以前山本は隣の部屋に住んでいたことがあった。山本は田中を無視して続ける。

『『環境を大事に』』と言つて注目を集めている北欧の女子高生が世界中に発信しているとおり燃料効率の悪くて環境汚染度の高い飛行機を利用して世界を飛び回る政治家やビジネスマンは『恥を知れ』』と主張するのは正論だわ」

「少しどころか根本から考え直さなければ地球が破滅すると言っても大げさじゃない」

「金がモノを言わないようにするにはどうすればいいのじゃ」

高額紙幣に印刷されている王族や政治家にマスクが施されたフェイク紙幣がテレビ画面に現

第四章 物々交換

れる。

「金が回らなくても人の心というのか、気持ちが回ればいいのでは。そうだ！ 何でもタダにすればいいんだ」

突拍子もない田中の提案に山本が驚く。

「えー！ そんなこと考えたこともないわ」

「そんなことしたら我先に高価な物を手に入れようと大混乱するぞ。第一そんな気前のいいやつが現れるわけないぞ」

大家もたまげる。一方山本が田中のクイズのような主張に応じる。

「貨幣経済社会から物々交換社会にするの？」

「いいえ。交換も一手段。こだわりません」

「どういうことじゃ」

「必要なモノがあれば言うてください。もし僕がそれを持っているのなら差し上げます」

「田中さんは余分にモノを持っているの？」

「持ってません」

「それじゃ、貰うばかりじゃ」

「貧しくても生活できてれば無償で働いて衣食住に苦勞している人を助けます。贅沢しなければみんななんとか生きていけると思うんです」

第四章 物々交換

「ボランティア社会にするの？」

『スマホがないと生きていけない』なんて言う人がいますが、そんなに遠い過去ではない時代では自動車やパソコンやインターネットがなくても、みんな生活していました」

「こんなのがあったら便利とかじゃなく、毎日生活さえできればそれはそれなりに楽しいと言いたいんじゃない。気持ちがあればいいと」

「確かに今は贅沢な生活をしているわ。織田さんや豊臣さんや徳川さんより遙かに素晴らしい生活をしているわ」

「家の中においても世界旅行できる。絶大な権力を持っていた織田さんと言えども天守閣から見える世界は知れていた」

「総合的に俯瞰的にとってもその贅沢の範囲は知れている。じゃが、その範囲をどんどん広げたのは、自由な発想ができる社会になって生まれた様々な発明とそれに触発された製造技術の向上、そして貨幣による経済体制じゃ」

「欲ですね」

田中の言葉に大家が小膝を叩く。

「物々交換で思い出したが『わらしべ長者』という童話があったぞ」

「ワラを物々交換して手に入れたモノをさらに物々交換して、最後には屋敷を手に入れたという話ですね」

第四章 物々交換

大家が感心して田中を見つめると同時に山本が叫ぶ。

「えー！ そんなバカな。童話の中の話でしょ？」

「山本さんはこの童話を知らないんだ」

「今も通用する話とは思えないわ」

「そんなことはないのじゃ。お互い持つてるモノがツボにハマると価値観を超えた交換が成立するのじゃ」

「それを『気持ちがる』というのです」

「そうかしら。欲しい物だったら言い値で買う人が結構いるわ」

「そこには味がないのじゃ」

「味？」

いつの間にか大家が田中の支持者になる。

「お互い相手を持つている物を絶対に欲しいと思つて交換するのじゃ。当事者以外の者から見ると、それこそバカバカしい取引に見えるが、本人同士は感激して相手を尊重するのじゃ」

「物を買ったお金で、欲しい物を手に入れるのではないのね」

「もちろんじゃ。今の貨幣システムはじゃ、売った金で同じ物を仕入れてそれを売る。その繰り返しを重ねて利益が貯まった時点でやつと自分が気に入った物を手に入れてニチャツとするのじゃ」

第四章 物々交換

「商売とはそういうもの。貨幣経済の典型ですね」

「でもそれが当たり前でしょ？」

「そう。儉約して真面目に一所懸命働くのは美德だけれど欲望は際限ないよな。何とか気を回してモノも回す。できると思うんだけどなあ」

「なるほど」

ついに山本も納得する。

第四章 物々交換